

# 海洋ごみの現状(平成26年度調査結果)について

環境省 水・大気環境局  
水環境課 海洋環境室

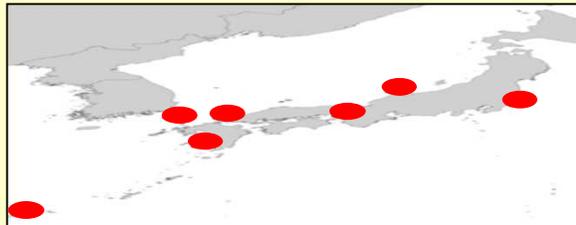
# 平成26年度海洋ごみの実態把握調査

## 漂着ごみの調査

我が国の7海岸における漂着ごみの量・種類等に関する定量的な調査や全国の清掃事業のデータを収集し、漂着ごみの総量推定等を実施。

### ○全国7海岸の定量的な調査

- ・個数、重量
- ・種類
- ・言語標記等



山口県下関市

### ○全国の清掃事業のデータ収集

- ・海岸漂着物地域対策推進事業(環境省)
  - ・都道府県・市町村把握活動
  - ・民間団体による清掃活動(※)
- (※(一社)JEAN、(公財)NPECのデータ)

漂着ごみの  
総量を推計

## 漂流・海底ごみの調査

我が国周辺の沖合海域及び瀬戸内海において、調査船を用いた漂流ごみの目視観測や、マイクロプラスチックの採集、底曳網を用いた海底ごみ調査を実施。

### (1) 漂流ごみの目視観測調査



船からの目視調査

### (2) 海表面を浮遊するマイクロプラスチックに係る調査



プランクトンネット

採取



プラスチックの破片

### (3) 海底ごみの調査



底曳き網

採取

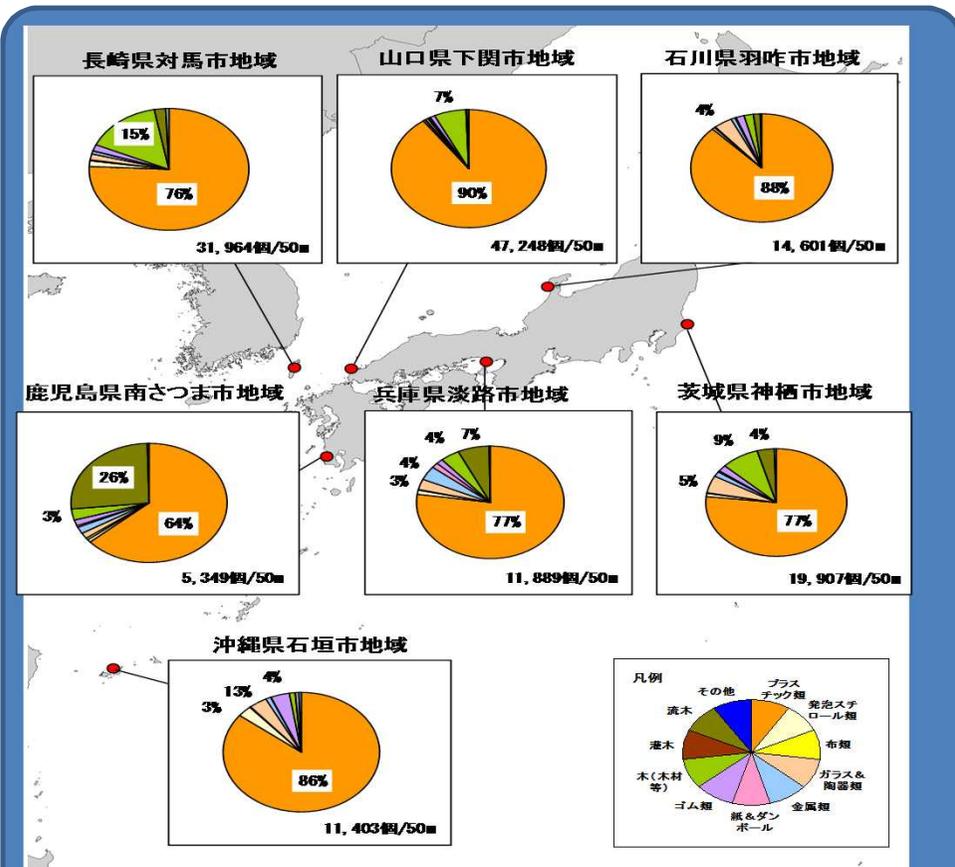


水深300mから回収された漁網

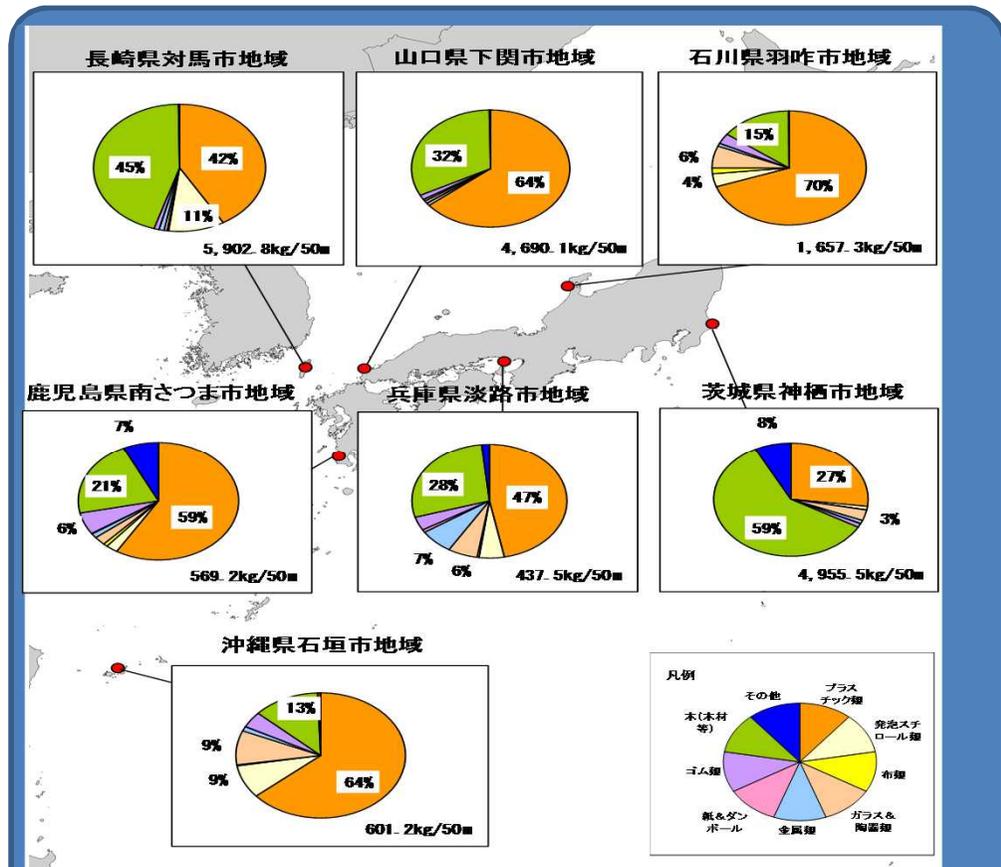
# 漂着ごみ調査結果(個体数、重量)

環境省は平成22～26年度の5年間、漂着ごみについて全国7カ所で実態調査を実施。

調査によれば、5年間の総計について、個体数においては最も種類が多かったのはプラスチック類で6～9割を占めた。また、重量において、人工物を比較したところ、長崎県、茨城県では木材等が多かったものの、その他の調査箇所では、プラスチック類が大半を占めた。



漂着ごみ(人工物+自然物)の個体数  
(5年間の合計: 灌木を除く)

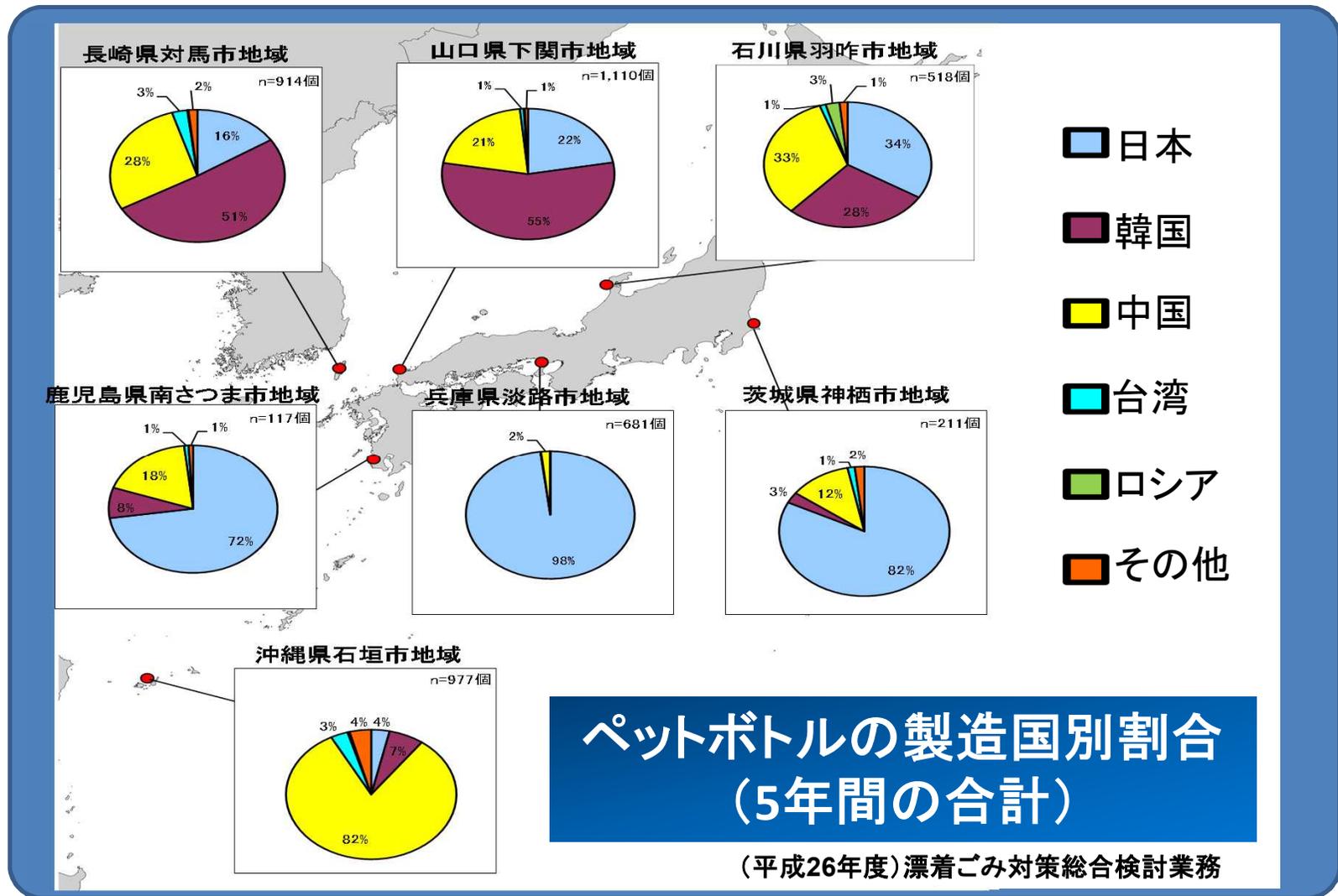


漂着ごみ(人工物)重量  
(5年間の合計)

# 漂着したペットボトルの製造国別割合

環境省は平成22～26年度の5年間、全国7カ所に漂着したペットボトルを、製造国別に調査した。

調査によれば、鹿児島県、兵庫県、茨城県など太平洋側では日本のものが多く、沖縄県、長崎県、山口県、石川県など東シナ海及び日本海側では中国・韓国のものが多かった。

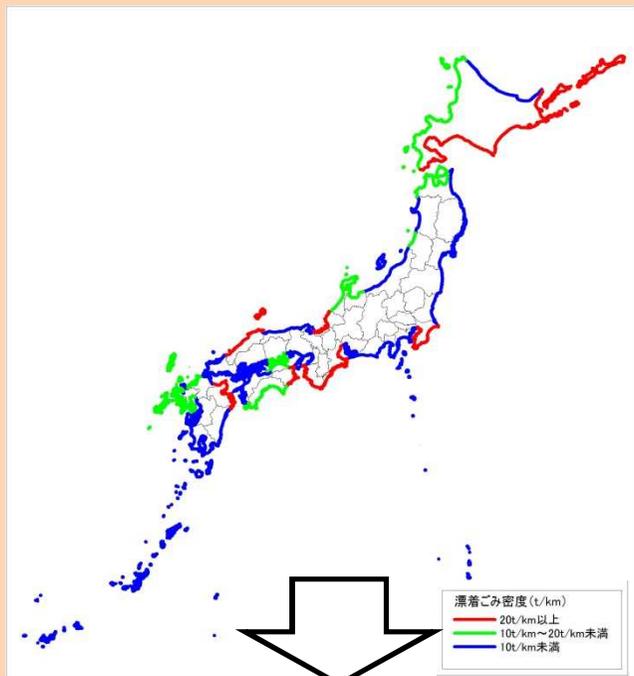


# 漂着ごみ回収量及び総量の推計結果

環境省は地方公共団体、民間団体等を通じ、H25年度における全国の漂着ごみの回収量を集計した。その結果、平成25年度に全国で回収された漂着ごみは、約4.5万tであった。

また、地域環境保全対策費補助金による漂着ごみの回収データから、全国の漂着ごみの量を推計した。その結果、全国の漂着ごみの量は、31～58万tと推計された。

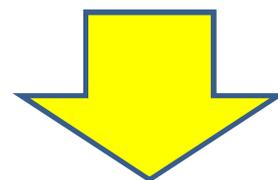
海岸漂着物地域対策推進事業の結果から算出された漂着ごみの密度分布



漂着ごみ全国総量推計  
31～58万t

## 全国の漂着ごみの回収量

- ・ 海岸漂着物地域対策推進事業（環境省）
- ・ 都道府県・市町村把握活動
- ・ 民間団体による清掃活動（※）  
（※（一社）JEAN、（公財）NPECのデータ）



全国回収量  
約4.5万t

# 漂流ごみ浮遊密度の調査結果

環境省は、漂流ごみの目視による浮遊密度の調査を実施し、プラスチックフィルム、発泡スチロール、その他石油化学製品の個数合計の密度について、大海区ごとに平均値で比較した。

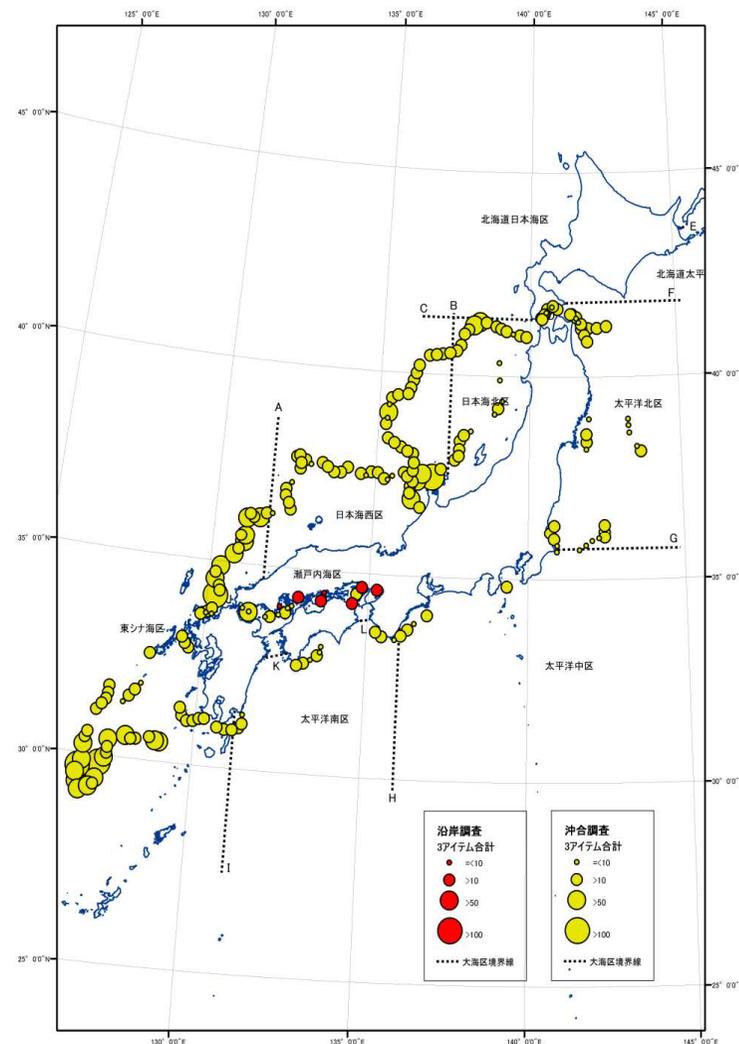
その結果、最も浮遊密度が多かったのは東シナ海区の39.1個/m<sup>3</sup>だった。また、日本海西区、日本海北区、太平洋南区については、閉鎖的な海域である瀬戸内海(沿岸調査)の18.7個よりも多い数字となった。

漂流ごみ目視調査(プラスチックフィルム、発泡スチロール、その他石油化学製品合計)浮遊密度の比較  
(最小値、中央値、最大値、平均値)

単位: 個/m<sup>3</sup>

調査名	大海区	最小値	中央値	最大値	平均値	調査箇所数
沖合調査	東シナ海区	0.0	39.4	148.2	39.1	n=66
	日本海西区	1.1	22.0	110.9	26.7	n=58
	日本海北区	3.2	20.9	79.4	28.8	n=29
	太平洋北区	0.4	13.0	45.4	17.8	n=35
	太平洋中区	3.9	15.7	28.2	14.8	n=6
	太平洋南区	0.5	12.2	30.5	20.8	n=12
	瀬戸内海区	0.2	8.0	54.1	14.1	n=10
沿岸調査	瀬戸内海区	0.6	22.0	32.0	18.7	n=7

漂流ごみ目視調査(プラスチックフィルム、発泡スチロール、その他石油化学製品合計)の浮遊密度の分布



# マイクロプラスチックの調査結果

環境省は、プランクトンネットによるマイクロプラスチックの採集を実施し、1～5mmの大きさのものについて、大海区毎に浮遊密度比較した。

その結果、最も浮遊密度が多かったのは日本海西区の約1.2個/m<sup>3</sup>だった。また、沖合海域においては、太平洋中区を除いては、閉鎖的な海域である瀬戸内海 の0.037個よりもかなり多い数字となった。

なお、瀬戸内海の調査は冬季に実施され、その他の海域は降雨による出水の影響で漂流ごみが多いと考えられる夏季に実施されているため、季節の違いによる影響の可能性が考えられる。

## マイクロプラスチック浮遊密度の比較(平均値、標準偏差)

単位: 個/m<sup>3</sup>

調査名	大海区	平均値	標準偏差	調査箇所数
沖合調査	東シナ海区	0.594	0.541	n=7
	日本海西区	1.232	2.847	n=17
	日本海北区	0.727	1.115	n=8
	太平洋北区	1.222	2.697	n=9
	太平洋中区	0.000	-	n=1
	太平洋南区	15.751	22.098	n=3
沿岸調査	瀬戸内海区	0.037	0.031	n=7

## マイクロプラスチック浮遊密度の分布

